死にたがりの彼女と、あの世に嫌われた彼

ヨウヘヰ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死にたがりの彼女と、あの世に嫌われた彼

【Ｎコード】
Ｎ７６５０Ｆ

【作者名】
ヨウヘヰ

【あらすじ】
心臓の病で入院している千瀬（ちせ）は、生きることに価値を見出すことができずにいた。ある日、死だけを望んで淡々と生活している彼女の病室に、入院常連者（？）の拓海（たくみ）という男の子が入院することになった。最初はわずらわしいと思っていた千瀬だったが、拓海とのふれあいを通じ、その気持ちにも徐々に変化が生じてくることに気づく。だが、拓海には一つだけ、大きな秘密があるのだった。

第1話：プロローグ

四月も中旬を向かえるというのに、病室の大きな窓から見える外の景色は、相変わらず無表情だった。
背の高さを比べるように建っているビル群、せわしなく左右に流れていく車や人間、それらを見下ろすように空を飛び回るカラスたち――。
何度こんな光景を、この無機質な空間から見たことだろう。私の周囲には、四季という概念はもはや存在していないのだった。

「はあ……」

私はカーテンを閉め、ため息ともつかない弱々しい吐息をもらすと、ほんの少し前に変えたシーツの上に横になる。
このパリパリとした新品のシーツの感触が、私はたまらなく嫌いだ。
右に左にごろごろと動き回り、わざとしわをつけていく。

「千瀬ちゃん、ご飯食べた？」

ドアをノックする音とともに、いつもの看護婦さんが病室に入ってきた。
同時に、私なんかと比にならないくらい大きなため息を吐いて、ほとんど残っている朝食を手に取った。

「またこんなにご飯残して。そんなにおいしくない？　病院食」

「うん。最悪」

私は悪びれる様子もなく、笑顔でそう答える。

「ちゃんと食べないと、病気はよくならないわよ」

彼女は困ったように笑いながら、お膳を台車に乗せると、代わりに体温計と薬を私に手渡した。

「食事で病気が治るなら、こんなもの必要ないじゃない？」

そういって、私が薬を手にとると、彼女の顔は完全に困った様子になった。

「だめよ、お薬飲まなきゃ発作起こしちゃうんだから」

「はいはい」

どうせ薬を飲み終えるまでは部屋いるのだ。早く飲んでしまおう。そう思い、一気に薬を流し込んだ。うん、苦い。いつになってもこの味には慣れそうにない。まあ、ここの食事と比べたらまだましかな。

「はい、あと体温もね」

私は無言で体温計をさすと、殺風景な部屋を見回した。

全体が白い部屋には、病室らしく目だったものは何もない。

あるものといえば、ベッドの左側に備え付けのテレビと、引き出しのついたテレビ台。そして右側にある大きな窓は、防音対策が施されているため、外の音は聞こえてこない。

音のない空間というのは本当に退屈で、時間が止まってしまったのではないか、という錯覚さえ感じるときがある。

そして、私の向こう側にポッカリと空いたベッドも、そんな錯覚を

引き起こすのに一役買っていた。

「看護婦さん。この前あそこに入院してたおばあさん、どうなったのかしらね」

「あら。他の患者さんのこと気にするなんて、千瀬ちゃんにしては珍しいわね」

「別に、ただの気まぐれよ……」

私は無表情のまま無人のベッドを見つめた。

「……あのおばあさんね、退院した翌日に亡くなったそうよ」

彼女は少しためらってから、言いにくそうに口を開いた。

「そう……」

顔色を変えず、私はベッドを見つめ続ける。つい最近まで、『死』というものと身近に接してきたことに、私は特別なにも思わなかった。

人間は生まれた瞬間から死に向かって歩き始める。生まれ、そして死ぬ――人間が繰り返してきたこの営みの輪からは、誰も逃げることはできない。

それを知っているから、私は死に対して恐怖はない。他人の死も、自分の死も。そして、生への欲求も私にはないのだ……。

私の思考を止めたのは、体温計の音だった。

「じゃあ、回診がくるまで安静にね」

「はーい……」

「次はちゃんと食べてね」

これには返事をしなかった。
彼女は再びため息を吐くと、部屋の扉に手をかけた。
しかし、何かを思い出したように中空を見上げると、こちらに振り返り

「そうそう、忘れてた。お昼からそこのベッドに新しい患者さんが入院することになったからね」

「そう、わかった……」

目線も合わせずそれだけ答えると、扉は完全に閉まった。
私はそれを確認すると、もう一度カーテンを開ける。
さっきまで青く澄み渡っていた空には、いつの間にか、うっすらと雲がかかり始めていた。

第2話：相沢拓海

いつものようにまずい昼食を残し、看護婦さんの小言を聞き流した後、私はなにをするでもなく、ベッドに横になっていた。
時刻は午後二時。病院内が最も静かになる時間であり、私がこの生活で唯一好きな時間だった。

「昼寝でもしようかな」

普段は小説でも読んで時間を潰しているのだが、あいにく昨日、最後の一冊を読み終えたばかりだった。
テレビでも見ようかと考えたが、平日の昼間では、特に面白い番組をしているわけでもなく、結局、昼寝くらいしか選択肢が残されていなかった。

ちょうど、うとうとし始めたときだ。足音が近づいてくるのが、私の耳に届いた。
最初は気にしていなかったが、その足音が確実にこの病室の手前で止まったのがわかると、私は体を起こした。この時間にいったい誰だろう。検温はとっくに終わったし、回診の時間でもない。

（コンコン）

やけに遠慮がちのノック音。ゆっくりと開いていく扉の隙間から、頭が一つ飛び出す。
その頭は、部屋をぐるりと見回して、最後に、まだ覚醒し切れていない私と目が合った。
そこまできてやっと思い出す。そうだ今朝看護婦さんが言ってたっけ、新しい患者さんが入院してくるって。

「失礼しまーっす」

真昼の静寂を打ち消すような明るい声と一緒に、男の子が一人、病室に入ってきた。背格好から見るに、私と同じくらいの年齢だろうか。右手にカバン、左手には包帯が巻かれている。

「俺、相沢拓海。今日から、ここで厄介になるけど、よろしく！」

拓海と名乗った男の子は、カバンを置き、空いた右手を私の前に差し出した。

「よろしく……」

しかし私は差し出された手に答えることなく一言だけ返すと、テレビをつけた。今の私はとても握手する気分なんかにはなれなかった。ただでさえ睡眠を邪魔されて不機嫌なのに、新しい患者が自分と同じくらいの年齢で、しかも男の子。病院ももう少し配慮してくれてもいいのではないか。

相沢は右手を元に戻す。普通の人ならむっとするところだが、特にそんな気配も見せず、口笛を吹きながら自分のベッドへ歩き出した。

「拓海君、荷物の整理できた？」

しばらくして、看護婦さんが入ってきた。

「あ、ほとんど終わりました」

「そう。入院期間は一週間くらいだから」

一週間もこいつと一緒いなくちゃいけないのか。私は誰も気づかない程度のため息を吐いた。

「じゃあ、なにかあったらナースコールしてね。あとは――そうそう、千瀬ちゃん」

看護婦さんが振り返る。

「ごめんね、今空いてるベッドがここしかないの。いろいろ気を遣うと思うけど、我慢してね」

ここで文句を言ったって仕方がない。私は黙ってうなずいた。

「ありがとう。拓海君もあなたと同じ高校三年生だし、それにとってもおもしろい子だから、すぐに仲良くなると思うわ」

彼女は笑顔でそう言ってのけるが、私にはそんな気持ちはさらさらない。

今は一週間をどうやって過ごすか考えるのが先決だ。

彼女が出て行ったのを確認すると、私はテレビを消した。ベッドの周りのカーテンを引いて、昼寝を再会しようと思ったからだ。

しかし、これがどうやらマズかった。

会話のきっかけでもつくりたかったのだろうか。テレビを消した途端、向こうのベッドから『なあ』という声が聞こえてきた。

「なに？」

とりあえず、その呼びかけに答える。

「なんかごめんな。でもさ、看護婦さんもいったとおり、病室がこ

こしかなかったんだよ……」

「いいわよ、別に気にしてないから」

ウソだけど。

「そっか。あんまり気ぃ遣わなくてもいいからな。千瀬」

私は一瞬耳を疑った。知り合って間もない人間に呼び捨てにされたからだ。

「わかったわ――。あのね、私今から昼寝しようと思うから、あんまりうるさくしないでね、『相沢さん』」

最後の言葉を少しだけ強めに言うと、私は勢いよくカーテンを閉める。

が、カーテン越しに聞こえてくる『おう、お休みー』という彼の声を聞き、私は今日一番のため息を吐いた。

第3話：ムカツク

翌朝。カーテン越しのにじんだ光を顔に受け、私は目を覚ました。
昨日はいろいろなことがあり疲れていたせいか（精神的に）、ぐっすりと眠ることができた。
私はあくびをかみ殺し、昨日の昼からずと閉じられっぱなしになっているカーテンをそっと開く。
いっそ『昨日のことは全部夢でした』なんてことになっていればいいのにと願ったが、現実はそう甘くなかった。
目の前に飛び込んできたのは、大の字になって寝ている拓海の姿だった。私は肩を落とす。へたをすれば、一週間ずっとカーテンを引きっぱなしかもしれない、なんてことを考えながら、音を立ててベッドに座った。

「千瀬ちゃーん、拓海くーん、朝よー」

突如、白衣を着た悪魔が、その最後の砦を崩していく。
「おはようございまーす……」

間延びしたあいさつ。目をこすりながら拓海が身を起こした。

「はい、ふたりとも検温しておいてね。また後で朝食持ってくるから」

体温計と騒がしさを残して、看護婦さんは部屋を出ていった。

「あ、おはよう千瀬」

相変わらず呼び捨て。もうつっこむ気力もない。

「おはよう……」

視線をはずしたままあいさつを返す。カーテンを閉めてもよかったが、どうせもう少しすれば看護婦さんがやってくる。意味がない。

「昨日はよく眠れた？」

「まあまあ」

「いやー、病院のベッドってやっぱ寝にくいな。動くたびにきしむ音がするし」

「そうね」

拓海の話を適当に聞き流す。

会話のきっかけを探そうとしているのか、それともこういう性格なのか。どちらにしろ、一人でべらべらとしゃべる人間は、あまり好きではない。

「それにしても、病院って退屈だよなー。おまけに左手がこんな状態じゃ、かなり不便だし」

いつまでしゃべる気だろうか。このままいけば自分の生い立ちさえ語り始めるかもしれない。

そのとき、ちょうど拓海の体温計が鳴り、話はそこで中断された。

私はこのときほど体温計に感謝したことはない。

「二人とも、朝ごはんよ」

しばらくして朝食を持って看護婦さんが現れた。
私はいつものようにみそ汁を一口すすり、ご飯を二、三口食べただけで食事を終了した。

「あれ、もう食べないの？」

ほとんど残っている私の朝食を見て、驚いたように拓海が尋ねる。

「私、朝は食欲ないの」

実際は朝食に限ったことではないが。

「でも、朝はちゃんと食ったほがいいって」

それから『ちょっと待ってろ』と言って、カバンを右手で探り始めた。そして、中から何かを取り出すと私のベッドへ向かってそれを投げた。

「これ食べとけ」

飛んできたのはメロンパンだった。

「別にいいわよ」

私はそれを投げ返す。

「遠慮するなって」

再び飛んでくるメロンパン。
どこまでおせっかいを押し付けてくる気だろう。

「遠慮なんかしてないわ」

もう一度それを投げ返した後、私はカーテンに手をかける。
が、カーテンをつかんだ瞬間、ひざがベッドの端から落ちそうになった。

「きゃっ！？」

当然そうなれば、落ちないように何かをつかむわけだが、私が両手でとっさにつかんだのは、カーテンだった。
小さな止め具で吊っているだけのカーテンが、私の体重を支えられるはずもなく、私にとっての最後の砦は、文字通り音を立てて崩れていった。
そしてそのまま、私は床に勢いよくお尻をうってしまった。

「おい、大丈夫か！？」
拓海が慌てて駆け寄ってくる。私はその顔をキッと睨んだ。

「べつにいいっていったのに！」

「ご、ごめん……」

私の一喝がきいたのか、拓海は塩をかけられたナメクジみたいに、急に勢いを失った。

「もういいから、戻って」

「うん……ごめん」ベッドに戻っていくその肩が小さく見える。さすがに強く言い過ぎたかな。

「なあ……コレ食べるか？」

前言撤回。やっぱりムカツク。

第４話：私の価値

メロンパンの事件後、私と拓海のベッドの間には、ついたてのようなものが置かれた。
私が見事に壊したカーテンは、どうやら簡単には直らないらしく、それまでの応急処置といったところだ。
看護婦さんには厳重注意を受けた。無論、拓海もだ。

「はあ……最悪」

思わずそんな言葉が口から飛び出すほど、私は精神的に参ってしまっていた。
こんな人の心に土足で入ってくるような人間と、あと六日も同じ部屋で過ごさなくてはいけないのかと考えると、憂鬱でしょうがない。
こんなことならば、病院食を一週間完食するほうがまだましだ。私の病気に胃痛が新たに追加されるかも。
そんなくだらないことを考えていると、

（コンコン）

軽快に扉をたたく音。そして、聞き覚えのある声がドアの隙間から聞こえてきた。

「ひっさっしぶりー、千瀬。元気してた？」

「美里……」

現れたのは、私の同級生の美里だった。
白と薄いピンクを基調とした服装が、外は春なのだということを改

めて感じさせる。

「やっぱり地元からじゃ遠いねーこの病院。久しぶりに早起きしたよ」

「だったら無理に来なくてよかったのに……」

私のそんな言葉にも、美里は怒った顔一つ見せず、

「またそうやって意地張って。人間素直が一番よ」

と笑って返すのだった。

「で、どう、ココの調子は？」

美里はベッドの端に腰をかけながら、自分の胸の中心を拳で二回ほどたたく。

「別に……。今はまだ薬でなんとかなってるけど」

「そっか……。早くドナーが現れればいいね」

「そんなの現れるわけないわ」

美里のちょっとした一言にも、私はすぐに毒づいてしまう。

別に、美里のことが特別嫌いというわけではない。ただ、美里のことを、私は自然と避けていた。

「そう言わないの。……それはそうとさ、あの子けっこうかっこよくない？」

美里の声が急に小声になる。

「あの子？」

「ほら、あそこのベッドに入院してる男の子」

そう言って美里は拓海のほうを指差した。

「美里、あんなのがいいの？」

「えー、普通にかっこいいじゃん。千瀬もちゃんと見てみなって」

私は美里に押されるがままに、ついたての隙間から向こうを伺う。
拓海はテレビを見ているようで、こちらからは横顔が見える。
そういえば、今までこういうふうに彼の顔を見たことがなかったが、
言われてみれば美里の言うことにも一理あるかもしれない。
ただ『黙っていれば』という前提が必要だが。

「ね、そう思うでしょ？」

私は黙って首をかしげた。
それからしばらく、美里が話して、私がそれに適当に相槌をうつ、
というのが続いたが、ふいに何かを思い出したように、美里がカバ
ンの中から本を一冊取り出した。見たところ、専門学校のパンフレ
ットのようだ。

「私ね、高校卒業したら美容師の専門学校に行くことにしたんだ」

そういえば、将来は美容師になる、といつか聞いたことがあった。

嬉しそうに自分の夢について語る美里を見ながら、私は別のことを考えていた。
私にも、自分の夢について考えたころがあったのだろうか。こんなに笑っていられたことがあったのだろうか、ということを。

「私、何年かかってもいいから、絶対に夢を叶えてみせる」

美里のその言葉に、私は急に現実に戻される。
そして、気づいた。

美里と私では、住む世界が違うのだ――と。

生きることに前向きで、いつも笑顔を絶やさない美里と、迫ってくる死に抗うこともせず、自分の殻に閉じこもっては、他人との関わりを絶とうとしている私。根本的なものが違うのだ。
美里は私にはないものをたくさん持っている。それに私は無意識のうちに憧れていたのではないか。
人間は自分にはないものを持っている存在に憧れを感じ、しかもそれは二極化する。
その憧れを必死に追い続けるか、その存在に嫉妬や恐れを抱くかだ。
こう考えれば、私が美里を敬遠するようになったのも説明がつく。
私の美里への憧れは妬み、恐れへと変わっていたのだ。それは最初は針で開けたほどの小さな穴だった。そして、いつしかその穴はゆっくりと広がり、もう自分自身では修復不可能のところまできてしまったのだ。
せめて、もう少し気づくのが早ければ、私が病気を患う前にわかっていれば、まだ違っていたのかもしれない。
でも、もう遅い。
私は片足を、すでに死という泥沼につっこんでしまっている。抗うほどに、私の体は徐々に底に沈んでしまう。苦しむことになる。

もう、私は事の成り行きを諦観することしかできない。ただ、死を待つことしか許されないのだ。

「あ、もうこんな時間」

美里が腕時計を見てから言った。一時間はしゃべっていただろうか。

「これから行かないといけないところがあるから、帰るね」

美里は立ち上がり、別れのあいさつを告げると、病室から出て行った。病室にはまだ美里の笑い声の残響がある気がした。

「いいやつじゃん、千瀬の友達」

美里が帰ってすぐに、向こうのベッドから拓海の声がした。もう朝の事件のことはすっかり忘れてしまっているような口ぶりだ。半分こうなることは予測していた。体が好奇心とおせっかいでできている拓海のことだから、必ず話しかけてくるだろうと。

「別に、ただの同級生よ」

「おいおい、そんな言い方ないんじゃねえか？　せっかく来てくれたのに」

「こんなもうすぐ死ぬかもしれない子のためにわざわざ遠くから見舞いに来るなんて、向こうも迷惑な話よね」

「迷惑だと思ってんなら、わざわざ見舞いにこないよ。千瀬のこと、本当に大切なんだろうな」

「そんなこと……」

「あの子も言ってたろ。人間素直が一番だって。千瀬は無理に人と関わろうとしてないだけで、本当は寂しいんじゃねえか？　そんなことじゃ、人生楽しめないぜ？」

私はなにも答えられなかった。ただ黙って床を見つめていた。確かに、拓海の言うとおりだ。私は自ら人との関わりを拒みながらも、まだいやしくも、どこかで人とのつながりを求めている。そんな自己矛盾に、私は薄々気づいていた。だから嫌だった。そのことを人に指摘されるのが。わかっているからこそ、辛かった。

「昨日ここにきたばっかりのやつに、私の何がわかるのよ！？　だいたい、人生楽しむってなに？　残り少ない人生を、どうやって楽しむっていうのよ！？」

感情のたがが外れる。湧き水のように、感情が外へあふれ出す。

「……もう、生きることがどういうことかわからない。私のたった十七年の人生に、価値なんて……ない」

歯がゆくて、私は両手を強く握り締めた。

「ほんとにそんなこと思ってんのかよ」

「え……？」

ついたて一枚で隔てた向こうから、真剣な声が聞こえた。

「俺は人生の価値なんてもんは、最初からないと思ってる」

「どういうこと……？」

「ひとそれぞれの人生はさ、価値なんてものさしで計れる代物じゃないってことだ。だから、長生きして大往生で死んだ老人も、この世に生まれることなく死んでいった命も、その人生に大きな違いなんてない、って俺は思ってる」

私は黙って耳を傾ける。

「それで、俺には一つ夢がある。それはな――笑って死ぬことだ」

拓海の声が急に柔らかくなった。

「俺は後悔する人生だけは絶対に送りたくないんだ。笑って死ねれば、後悔はしてない、ってことだろ」

その後、拓海は『まあ、これは俺の持論だけど』と笑った。そして、ベッドから降りると、私のほうへ歩いてきた。

「だから、俺自身のためにも、千瀬のためにも、こうやって話しかけてるんだ。お互いが後悔しないためにな」

そう言う彼の笑顔はとてもまぶしくて、今まで感じたこのない感覚が、私を包みこんでいった。

「意味わかんないわよ……」

「今はわからなくていい。いつかわかることだから」

拓海は自分のベッドへ戻っていった。
その背中を見送った後、私は窓の外を見つめた。見慣れているはずの景色が、今日は何か違って見えた。

第5話：そして私は恋をした

彼が入院してきて、一週間がたとうとしていた。
美里がお見舞いに来た日以来、私にあった拓海への嫌悪は、春の陽気にあてられたのか、氷が溶けるみたいになくなっていった。

いよいよ明日は拓海の退院の日。また明日から静かな日々を送ることができて嬉しいはずなのに、私の心の中には、はがしきれていないシールのような感覚が残っていた。
それは他でもない、拓海のことである。
あの日の彼の笑顔が、私の中からどうしても離れてくれない。あの、陽だまりのような温かい笑顔が。

なぜ、こんなふうになってしまったのか。私は食事にもろくに手をつけずに考えた（まあ、それはもともとなのだが）
そして、一つの結論がでてきた。

――私は拓海が好きなのだ――

そんな結論がでた瞬間、私は首を横に振った。それはもう、首が飛んでいかんばかりの勢いでだ。
私が拓海のことを好き？　あんなおせっかいで、おしゃべりで、礼儀のかけらもないような男に、私が恋をしてるだって？

「ありえないわ……」

「ん？　なんか言ったか？」

ついたての向こうから拓海が問いかけてきた。

「な、なんでもない！」

そう言う私の声は若干うわずっていた。
どうやら私は思っていたことを口に出してしまうときがあるようだ。
今度から気をつけなくてはいけない。

「そっか。あ、俺ジュース買いに行くけど、千瀬欲しいものある？」

「別にいらない……」

拓海は『わかった』と言って、病室を出て行った。
扉が閉まり、彼の足音が完全に遠のいたことを確認すると、私は体の奥深くにあったものをすべて吐き出すように、盛大なため息を吐いた。
こんな気持ちになったのは、入院して以来、いや、おおげさかもしれないが、今まで生きてきて初めてかもしれない。
それがなんなのかはまだ理解することはできないが、少なくとも、マイナスのものではないことは確かだった。

「どうしちゃったんだろ、私」

言ってはっとして、自分の口を抑える。思ったことを口に出さないようにすると、さっき決めたばかりではないか。
私はベッドから降りると、窓の近くまで歩き、足を止めた。
外を眺める。
私の心とは対照的な、雲ひとつない快晴。太陽は憎らしいほど下界を照らし、人たちもいつもと変わらぬ歩みを続けていた。

そろそろ拓海が帰ってくる。ベッドに戻ろうか。
そう思った刹那、急に私の視界がぶれた。そして同時に襲ってくる、激しい胸の動悸。まるで灼熱の手で心臓を鷲づかみにされている感覚。

「っつ……っく……！」

私は胸を押さえてその場に倒れこんだ。そして、ベッドにあるナースコールまで体を引きずるようにして近づく。
せめて、窓のそばにいなければ、すぐにナースコールができたはずだった。
体が鉛のように重い。力もほとんど入らない。もう私の体は限界に近かった。
そこで私は悟った。これは運命なのだと。
私が窓の近くにいたときに発作が起こったのも、すべて運命なのだ。
そうか、やっと向こうからのお迎えがきたようだ。これで、胸の痛みとも、このわけのわからない感情ともおさらばできる。よかったではないか。これで、これで――。
そこで、私の意識は完全に闇へと消えていった。

◆

（…瀬……ろ…千…起き……ろ…千……瀬…）

暗闇の中、何かが小さく耳に響く。
その音はしだいに大きくなり、段々と私の耳に届くようになる。

「千瀬起きろ！！」

この声は、拓海？　ヤダなあ、あの世にまでついてくる気なのだろ

うか。これじゃあ、こっちに来た意味が半減するじゃない。

「千瀬起きろ！！」

うるさいわね……別に寝てないわよ。目を閉じてるだけ。今開けるから黙っててよ。

私はゆっくりと目を開ける。最初に見えたのは三途の川でも、きれいな花畑でもなく、白い天井と目を潤ませた拓海の顔だった。

「あれ……私……死んだんじゃ……」

「千瀬……よかった……」

よく見ると、私のベッドの周りには、数人の看護婦さんと、私の主治医の先生がいた。みな私の顔を見るなり、安堵のため息を漏らしたり、よかったなどと言っているようだった。

「千瀬ちゃん、よかったわね」

一人の看護婦さんが私に話しかける。

「看護婦さん、私……」

「拓海君がね、倒れてる千瀬ちゃん見つけて、急いでナースコールしてくれたのよ。もし、もうちょっと対処が遅れてたら危なかったんだから。さあ、もうちょっと休んでなさい」

そうか、私は生かされたのか。

そう思った瞬間、私はもう一度目をつむった。

私が目を開けると、もうさっきのように大勢の人はいなかった。その代わり、拓海が私のベッドの横のイスに座っているのがわかった。どれくらいの時間がたったのかは正確にはわからないが、外の景色がオレンジ色に変わり始めていることから考えれば、そうとうな時間が経過したのはわかる。

「もう起きてて大丈夫なのか？」

拓海が心配そうに尋ねる。

「ずっと、そこにいたの……？」

「ん……まあな」

「何時間くらい？」

「四、五時間くらいかな」

「そう……」

私は横になっていた体を起こす。体は少しだるいが、もう胸の痛みはなかった。

「ねえ……」

「なんだ？」

つい数時間前までの決心はどこかへ消えてしまったようだ。私はまた、思っていたことを口に出す。

「……なんで、助けたの？」

私の口からでてきたのは、彼に対する感謝の気持ちなんかではなかった。

「なんでって……人を助けるのに理由なんていらないだろ」

腑に落ちないといった表情で彼は答える。

そこから続く私の言葉は、多分、最低だ。

「あんたが助けたりしなかったら、あのまま死ねたのに……。もうこれ以上、苦しまなかったかもしれないのに……！」

私は自分自身を制御できなくなっていた。感情のおもむくままに、彼に言葉を投げつける。

「わざわざ私なんかを助けたりして……バカよあんた！　意味わかんない！」

彼は一言もしゃべらず、私の顔をじっと見つめていた。彼の顔は無表情だった。

「ほんと、あんたは――」

そう言いかけたときだ。突然彼が立ち上がり、怪我をしていない右手を挙げた。

私は瞬間的に殴られると思い、目をつむる。

しかし、その右手は私の右手をつかみ、そのまま私の心臓のほうへ

持っていった。
「お前のココは、本当に死にたいって言ってんのかよ！　弱々しくて、不定期な鼓動かもしれないけど、必死に生きたいって言ってんじゃねえのかよ！？」
そして次の瞬間、私の体は彼の腕に包まれた。
「ちょ、ちょっと――」
「死にたいなんて、悲しいこと言うなよ……」
彼は、泣いていた。
それでも私は素直になれなくて、
「私が死んだって、悲しむ人なんかだれもいないのに……」
「だったら俺が、千瀬のために泣く。だから死ぬなんて言うなよ」
彼はいっそう強く、私を抱きしめた。
私の奥から熱いものがこみ上げてくるのがわかる。やがてそれは水の粒となって、私の目から落ちた。涙なんて、とっくの昔に枯れてしまったと思っていたのに。
そして同時に気づいた。
私は拓海のことが好きなのだと。
彼は私の世界を変えてくれた。死で覆われた闇の中で、もがこうともしない私を、必死でひっぱりあげようとしてくれた。
おせっかいで、デリカシーにかけているところもあるけれど、そんなのも全部ひっくるめて、私は知らないうちに彼に惹かれたのだ。
ただ一つ悔やまれるのは、その気持ちを伝える術を、今の私は知らないことだった。

「ごめん……」

私がそう言うと、彼は腕を解いた。

彼は服の袖で涙を拭くと、あのときと同じ笑顔を見せた。

「だいたいな、神様はそう簡単に死なせてくれないんだからな。俺みたいに」

「どういうことよ」

「俺さ、今まで五回も事故にあったけど、全部骨折だけですんでるんだ」

彼は自慢げに胸を張った。そんな彼がおかしくて、私は笑った。

「五回も！？　あんたは例外なだけよ。きっとあの世に嫌われてるんだわ」

「そうかもしれないな」

それから二人で笑いあった。久しぶりに心から笑えた気がした。

◆

「じゃあ、一足先に帰るわ」

「うん」

そして迎えた彼の退院の日。彼は荷物を持って私の前に立っていた。

「絶対にお見舞いに行くから。そんときにまだ死にたいなんて言ってたら、しょうちしねえからな」

「わかってる。拓海ももう怪我するんじゃないわよ」

「うーん……なるべく気をつける」

「ちょっと！」

彼は『冗談だよ』と言って、私の頭をポンポンと軽く叩いた。

「おっと、もう行かなくちゃ」

彼が扉に手をかける。そしてもう一度私のほうに向き直る。

「久しぶりに楽しい入院生活だった。入院ってのも捨てたもんじゃねえな。じゃあな！」

こうして、風のように現れて、私の心を乱した彼は、また風のように去っていった。

私は結局、何も彼に伝えていない。でも、これでいい。いつかまた、大人になって、どこかでめぐり会ったときまで、この気持ちは取っておこうと決めたから。

しばらくして、看護婦さんが空きベッドの整えにやってきた。私は彼女に言った。

「看護婦さん」

「なに、千瀬ちゃん？」

「そこのベッド、できることなら、空けておいてね」

「え、どうして？」

「だって、あいつのことだから、また事故にあって入院してくるかもしれないでしょ。そのときに言ってやるの。『またか』って」

看護婦さんはクスクスと笑うと、

「わかったわ」

と言ってくれた。

私は開け放たれた窓から外を眺める。この前と同じ、雲一つない青空のはずなのに、なんだか違って見える。

そして、柔らかい風が私の髪を優しくなでていった。

第6話：曇天

彼が退院して、ちょうど二ヶ月がたった。私の期待を含んだ予想に反して、拓海はここに戻ってこなかった。それはそれでいいことなのかもしれないが。

この二ヶ月間、拓海が私に残してくれたものはとても大きなものだったことを感じた。

まず素直になれた。

人と話すときも、相手の目を見て話せるようになったし、なによりつまらない意地を張ることがなくなった。感情も、以前と比べて表に出るようになった。この前お見舞いに来た美里が喜んでたっけ、

『千瀬が笑うようになった』って。

あと私が一番変われたと自覚したところは、生きたいと思うようになったことだ。

先週、発作を抑制する薬の量が増えた。それは私の命が、ゆっくりと、しかし確実にすり減っていることを、私に知らせている。

以前の私なら、そのことに何も感じないまま、ただ人を嫌い、自分を嫌いながら死までの日々を過ごしていただろう。

しかし、今の私は違う。その事実をしっかりと受け止めながらも、生きることを諦めてはいない。

『私はまだ生きていたい』という強い意志が、私の中に宿っているのだ。こんなにたくさん私を変えてくれた彼に、感謝しなくてはいけない。

私はベッドの上から、窓の外を眺めていた。

六月の夜空は、その大半が雲に覆われているせいで、ほとんど星は見えなかった。

その代わり、地上に転々と光る明かりが目立つ。赤、青、黄といっ

たさまざまな色の光が、星の代わりに地上を照らす。生命のにおいが漂うそこは、これからが本番のようだ。

「千瀬ちゃん！」

突然、後方の扉が勢いよく開く。

ノックもしないで看護婦さんが入ってきた。どういうわけか、息が荒かった。

「どうしたの、そんなに慌てて」

彼女は息を整えるのも忘れ、口を開いた。

「拓海くんが……拓海くんが……」

人からその名前を聞くのは久々だった。その言葉を聞いたとき、私の脳裏に彼の笑顔がフラッシュバックする。

「拓海くんが、事故で……」

「事故？　そっか、またやっちゃったんだね、あいつ。二ヶ月か……あいつにしてはがんばったほうじゃない？　で、また骨折？」

「千瀬ちゃん！」

彼女の口調が急に強くなる。私は顔をしかめた。違和感が背中を這っていくのを感じた。

「拓海くんがね……事故で……今、危険な状態らしいの……」

搾り出すようにして彼女の口から出てきた言葉に、私の周りの時間は一瞬止まった気がした。

「え？　今、なんて……」

「詳しいことはわからないけど、今、下で緊急手術してるらしいわ」

思考が完全にマヒする。さっきまで浮かんでいた彼の笑顔は、まるでテレビに映った砂嵐のように消えていった。

「ウソ……ウソよ、そんなの……。信じたくない！」

私は両手で耳をふさいで、全てを否定するように頭を横に振った。目をつむって、視界を暗闇の世界に放り込む。

そう、きっとこれは悪い夢。そうに違いない。次に目を開けたとき私が最初に見るのは、白い天井のはずだ。

そう自分に言い聞かせ、目を開ける。

しかし、私をあざ笑うかのように、そこにあった景色は何一つ変わってくれてはいなかった。

「……拓海はどこで手術してるの……？」

「一階の、東側にある一番奥の手術室――千瀬ちゃん！？」

彼女が言い終わるよりも早く、私の足は動いていた。

部屋を飛び出し、エレベーターに向かって走り出す。

後ろで看護婦さんが私の名前を呼んでいるようだったが、すぐに聞こえなくなった。エレベーターが開くとすぐに私はそれに乗り込み、扉を閉める。一階のボタンを押すと、エレベーターは動き出した。

斜め上にある階表示のランプの点滅が、徐々に一階へ近づいていく。

そのときの時間の流れを私はひどく遅く感じた。
扉が開く。私は急いで駆け出した。
夜の病院というのは寒気がするくらい静かで、それがかえって私の不安をあおっていく。
だから、私はそれをかき消すために、走り続けた。
途中で、足がもつれて転んでしまった。思えば、入院してから、こんなに走ったことはなかった。胸も苦しくなってきた。
それでも、私は走ることをやめない。今は、彼への想いだけが、私を駆り立てている。早鐘を鳴らす心臓と同調するように、私の足も速くなっていた。
しばらくして、私の視界の中に、『手術中』という赤いランプが点灯しているのが見えてきた。

「はあ……はあ……」

短い息を何度も吐きだし、胸を抑えながら壁際にあるベンチに腰をおろした。手術室の分厚い金属扉が鈍く光り、私をこれ以上近づけないように威嚇しているように見える。今はこうして待つことしか、私には許されないのだ。
時計が時を刻んでいく音以外、何も聞こえない。
熱くなっていた体の火照りは少しずつ冷めていき、徐々に冷静さが戻ってきた。そのせいだろう。私の脳裏に再び彼の笑顔が映った。
それだけではない。彼が私にくれた言葉や、抱きしめてくれたこと、彼との思い出が濁流のように押し寄せ、一気に私を飲み込んでいく。
やがてそれは涙に形を変え、床を濡らした。

私が死んだら、泣いてくれるって約束してくれたじゃない。
それなのに、ひどいよ……。
私、まだ拓海にあのときのこと『ありがとう』って言ってないのに。
まだ拓海に『好き』って言ってないのに……。

私は涙をこらえることもせず、泣き続けた。

◆

いったいどれくらいの時間がたったのだろうか。
永遠とも思えるくらい長い間、ここに座っていた気もする。
涙は枯れて、私のほほには塩の道ができていた。
赤いランプが消える。私は反射的に立ち上がった。

分厚い扉が開き、ストレッチャーに乗せられた拓海が運ばれてくるのが見えた。その後、執刀医だろうか、男が一人、マスクを外しながら現れた。
私は彼に駆け寄りたい気持ちを抑え、その医師に尋ねた。

「手術は、どうだったんですか？」

「君は？」

「えっと……友達です」

「そうか。よかったね、手術は成功したよ」

にっこりと笑ってその医師は言った。
その瞬間、私の体の力はすっと抜け、糸の切れた操り人形のようにその場にへたりこんだ。

「おっと、大丈夫かい？」

「あ、すいません……」

医師が私の体を起こしてくれた。そして一つ息を吐き出した。

「実はかなり難しい手術だったんだ。事故の目撃者の話から考えても、手術が成功する確立はほとんどないと考えてもよかった。だけど、手術は成功した。もちろん私も最善は尽くしたけど、それ以上に、彼の生命力の強さが大きかったんだと思うよ」

そうだ、私は大事なことを忘れてた。彼はあの世に嫌われてるんだ。こんなことでは、彼は死なない。

「本当に、ありがとうございました」

私は深々と頭を下げた。

「いいよ。君も早く自分の病室にもどるといい」

「え？　なんでわかったんですか」

「君の履いてるスリッパ、ここの病院のものだからね。それで」

「そうだったんですか……。あの、彼のお見舞いは……」

「さすがに今日は無理だね。そうだ、意識が戻ったら君の病室に連絡がいくように、僕から話しておくよ」

「ありがとうございます」

それから私は名前と部屋の番号を言った後、もう一度深く頭を下げた。優しい人でよかったと思った。

私が病室に戻る途中、あのときの看護婦さんがナースステーションからでてきた。

「千瀬ちゃん、拓海くんどうだった？」

「成功したって、手術」

「そう、よかったわね」

彼女は笑顔で胸をなでおろした。

病室に戻った私は、時計を確認する。すでに日付は変わっていた。

ベッドに横なると、緊張の解けた体には、すぐに睡魔が襲ってきた。

目を閉じる。心地よい疲労は、すぐに私の意識を奪うには充分だった。

第7話：織姫と彦星じゃないけれど

拓海の手術が成功して三日後。私はいつもどおり、朝のまぶしい日差しに照らされ、目が覚めた。
今日から七月。梅雨の季節も終わり、これからは太陽の活動も活発になってくるだろう。

「千瀬ちゃーん、おはよう」

「おはよー……」

ちょうど検温をしにきた看護婦さんが部屋に入ってくる。
私は目をこすりながらあいさつを返した。

「そうそう、拓海くんね、昨日の夜に意識が戻ったらしいわよ」

その言葉で、私の眠気は一気に吹き飛んだ。

「ほんと！？」

「ええ。夜中に目が覚めてね、意識もはっきりしてるみたい。今日のお昼にでも、お見舞いに行ってあげたらいいわ」

「うん！」

拓海の意識が戻った。それだけで私の胸ははずみ、自然と顔がほころんだ。

昼食を済ませた私は、時間がくるまでテレビを見て待っていた。で

も、その内容はまったく頭に入ってこない。心はすでに部屋の外にあった。その姿はまるで、明日の遠足を楽しみにしている小学生のようだ。
今の私を、昔の私が見たら、いったいなんて言うんだろう。

「そろそろ、いいかな」

時計を確認し、私は部屋を出た。
少し早歩きで病院の廊下を通り抜ける。看護婦さんに教えられたとおりに通路を行くと、一つの病室にたどり着いた。
扉の横の壁には『相沢拓海様』と名札が貼ってある。ここで間違いないようだ。
病室を前に一つ深呼吸して、扉に手をかける。
二ヶ月ぶりに会う彼は、私を見て、どんな顔をするのだろうか。
私には、話したいことがたくさんある。
前より素直になれたこととか、笑えるようになったこととか、生きていたいと思うようになったこととか――ほんとにたくさんある。
たくさんあるはずなのに――

「よっ！　千瀬」

彼が笑顔で私の名前を呼んだ瞬間、わけもなく涙がこぼれた。そして、搾り出すように一言、

「バカ……」

それだけしか出てこなかった。

「二ヶ月ぶりに会ったのに、最初の一言がそれかよ」

彼は苦笑いしながら、そばにあった椅子を指差した。私は涙を拭いてそこに座る。

「怪我、大丈夫なの？」

「ああ、骨折と、あと内臓に傷がついてたって言ってたかな。あとは、頭打ったから、今度検査するって」

彼はこの前とは逆の右腕に包帯、左には点滴をうっている。服の隙間から見える擦り傷や切り傷、頭に巻かれた包帯も痛々しかった。

「でも、もう大丈夫だよ。三日もぐっすり寝たからな」

「だからって、あんまり無茶しないでね」

無邪気に笑う彼を見て、私は改めて実感した。彼が帰ってきたのだと。

彼とこうやって話せて、同じ時間を共有できることだけで、私の心は幸福で満たされていった。

「なあ、千瀬」

彼が言いにくそうに尋ねる。

「なに？」

「ちゃんと守ってるか、死にたいなんて言わないっていう俺との約束。俺はさ、怪我しないって約束破ったけど……」

「うん。守ってる。それにね、生きていたいって思えるようになっ

た」

「そうか。安心した」

そう言うと、彼は笑って私の頭をなでた。久々に彼のぬくもりに触れた気がした。

「そうだ、千瀬に見せたいものがあるんだ」

彼は左手でカバンの中を探ると、そこから写真を何枚か取り出した。そしてそれを私に手渡す。

写真に写っていたのは海だった。

「俺、昔から海が好きでさ。ほら、自分の名前にも入ってるし。それで、旅行行ったりしたときに写真撮るんだ」

水面に反射した光まで鮮明に映し出された写真を見て、私はまるで自分がその場にいるような感覚にさえなった。

「これを、私に？」

「病院じゃ、いつも同じ風景しか見れないからな。少しは喜んでくれた？」

「うん、嬉しい……」

その後、彼は写真について説明をし始める。

「これが中二のときの旅行で、これが高一のとき、でこれが――」

「これが？」

「……忘れた」

思い出せないのが悔しいのか、がっくりと肩を落とす彼。そんな彼を見て、私はいいことを思いついた。

「ねえ、約束破ったんだから一つお願い聞いてくれる？」

「内容によるな。あんまり難しいのはナシだからな」

「病気がもしよくなったらね、海に連れて行ってほしいな」

彼は間髪いれずに

「まかせとけ」

と笑った。

それから他愛もない話を重ねるうちに、時間はあっという間に過ぎていった。

ほんとはもうちょっとこうしていたいが、午後の回診もあるからそろそろ病室に戻らなくてはいけない。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

私が扉の近に立ったときだ。彼はふいに私を呼び止めた。

「今月の七日、夜の九時くらいに、ここに来てくれ」

私は『わかった』と言って、扉を閉めた。

◆

七月七日。私は言われたとおりに九時に彼の病室の前にやってきた。
これからなにが起きるのかはわからないが、とりあえず部屋に入る。

「来たよ」

「よし、じゃあ行くか」

「行くって？」

「ついてくりゃわかるよ」

彼はブランケットを一枚、折りたたんで脇に抱えると、私の手をとって歩き出した。大事故にあった様子はまったく感じられないほど、回復しているようだ。
エレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押す。私は期待と不安でただ点滅するボタンを見ていた。
最上階にたどり着くと、私たちはその裏手にある階段に向かった。
その先は、もちろん屋上へと続いている。

「この屋上、十時までは開いてんだ」

ドアノブに手をかける。低い音とともに、ドアが開かれた。
屋上は、二メートルほどの高さの柵が周りを囲い、貯水タンクとベンチがあるだけの空間だった。
私はここに来たことがなかったが、居心地は悪くない。
風もなく、初夏の夜の澄み切った空気が流れていた。

彼は私をベンチまで誘導し、肩にブランケットをかけた。夏といっても、まだまだ夜は肌寒さを感じる。彼なりの優しさが嬉しかった。

「なにしにここに来たの？」

「ほら、空、見てみ」

私の隣に座った彼は、指を上に突き出す。そこには、夜の闇を切り裂くように、乳白色の星の川がかかっていた。
その美しさに、私は息をのんだ。

「そっか、今日は七夕だったね」

「そうゆうこと」

今まで、あまり七夕を気にしたことがなかった。幼稚園や、小学校低学年くらいの記憶も、なんともあいまいなものだ。
だから、その美しさに目を奪われた私は、瞬きすることさえ忘れ、星空を眺めた。
いつも窓という限られた範囲でしか見ることのできなかった空が、今はこうして見渡すことができることに、私自身も解放された気分がした。

「ほら、拓海も寒いでしょ？　入りなさいよ」

「お、俺はいいよ」

「恥ずかしがらなくてもいいじゃない」

彼は渋っていたが、根負けしたのか、とうとう私と肩を並べて、ブ

ランケットをかけた。
しばらく二人で話しをしていると、
「それにしても、今日が晴れててよかったな。織姫と彦星もちゃんと会えてるだろうな」
織姫と彦星――そんな彼の言葉に、思わず自分と彼を重ねてみる。
織姫と彦星は、今日、この一日のために一年も待つ。
しかし、たった二ヶ月という期間も私にとっては、その二人に負けないくらい長く感じた。そして、再会した喜びも同じくらい貴重なはずなんだ。
そっと彼の横顔を見る。
今度、彼が退院すれば次に会えるのはいつだろう。もしかしたら、次に事故が起きれば助からない可能性もある。それに、私が先に死んでしまうことだって――。
胸がきつく締められる。発作ではないけど、とても苦しい。
この気持ちは、大人になって言うって決めたはずだった。でも、今を逃せば、もう機会はめぐってこないかもしれない。
だったら――
「ねえ……」
「ん？」
彼の顔を直視できない。心臓が張り裂けそうなくらい高鳴っているのがわかる。
「あのね……ずっと、言いたかったことがあるんだけどね……」
彼は黙って私の言葉を待つ。

伝えるんだ。ちゃんと自分の気持ちを。

「……き……なの」

「え？　聞こえなかった」

「拓海のことが好きなの！　……だから……このまま友達のままなんて……やだ」

顔が熱い。私の弱い心臓が、内側から強く叩いているのがわかる。
彼は驚いたように目を丸くした。そして、しばらく考えた後、もう一度、空を見上げた。

「……ごめん」

拓海はただ一言、そう呟いた。
風は吹いていないのに、背筋に寒さを感じた。

「そ、そうだよね……。私じゃ、ダメだよね……。なんだか私、勘違いしてたみたい」

必死に強がって、笑ってみせる。

「違う！　……そういうことじゃないんだ……。けど……ごめん」

拓海は申し訳なさそうに目線を下げる。
私は心のどこかで、いい返事を期待していた。きっと彼も私のことが好きだ、なんて勝手なことを考えていたのかもしれない。
でも、返事はその反対。
だったら、あんまり勘違いをさせるようなこと、してほしくなかっ

たな。優しさや笑顔を私に向けてほしくなかった。
そうすれば、こんなにも胸が苦しくなることもなかったのに。

それからのことは、あまり覚えていない。
どちらからともなく、帰ろうと言いいだし、私は彼を見送らずに、
自分の病室のある階でエレベーターを降りた。
それから、すぐにベッドに横になった。
そして、嗚咽を漏らすように、泣きながら夜が明けるのを待つのだ
った。

第8話：涙の味

気がつくと、私は暗闇の中に一人でたたずんでいた。
黒い絵の具をそのまま塗りつぶしたように深い暗闇。一歩一歩、私は足元を確かめるようにそこを進んでいく。
すると、目の前に淡い光の塊が現れた。手を伸ばせば届きそうな距離だった。
目を凝らしてみてみると、その光は形を変え、だんだんと人の形になっていく。そして、私の目の前に現れたのは、優しく微笑んでいる拓海の姿だった。

「拓海……」

その拓海の姿に触れようと、私は手を伸ばす。しかし、その瞬間、それは後方に下がり、私の手は闇をつかんだだけだった。
私はそれでも必死で手を伸ばしたが、私が一歩進めば、そのぶんだけ拓海の姿は後ろに下がり、私の手は宙を空振りし続けるのだった。

「待って！　待ってよ！」

拓海は何も言わず、ただ笑って私を見ている。そして、その姿が徐々に後ろの闇に吸い込まれていくのがわかった。

「いかないで！」

私は駆け寄ろうとするのだが、その距離はいっこうに縮まる様子を見せない。
逆に、深い粘性の闇が私の四肢にへばりつき、走る力を奪っていった。

もどかしい。こんなにも近くにいるのに、触れることすらできないなんて。

「いや！　いや！」

私の叫びもむなしく、彼の姿は完全に闇に飲み込まれていった。

◆

「夢……か」

目を開いた私の視界に見えたのは、白い天井だった。

上体をベッドから起こし、時計を確認する。朝六時。こんなに早く起きたのは久々だった。

あくびをかみ殺し、半覚醒状態の頭で、昨日のことを思い出してみる。

拓海と屋上に行って、星を眺めて、二人で肩を寄せ合って、私が告白して、それで――

「ふられたんだっけ……」

最後の一文が口から漏れる。私は自嘲気味に笑うと、引き出しの中から手鏡を取り出した。

真っ赤にはれた目に、乾いた涙の跡、ぼさぼさの髪型。

「ひどい顔ね」

鏡の向こうの自分に話しかける。向こうの自分も同じように口を動かした。

なんでこうなってしまったんだろう。どこで選択肢を間違えてしま

ったのだろう。
告白なんてしなければよかった。今のままで我慢すればよかった。
次からどんな顔をして彼と話せばいいのか。いや、彼は優しいから、何もなかったように話しかけてくれるだろう。でも、私には昔どおりなんてこと、できるわけがない。
繰り返す自問自答。私はひざを抱え、ただ時間が過ぎるのを待っていた。

お昼になった。昼食を済ませ、テレビを見ていた私の病室に、美里がお見舞いにやってきた。

「やっほー、千瀬」

「久しぶり、美里」

私は普通に返事をしたつもりだったが、わずかな異変に気づいたのか、彼女はまゆひそめた。

「あれ？　千瀬、なんかいつもと違わない？」

「そんなことないよ。ふつうだよ」

「ウソ。絶対なんか私に隠してる。悩みがあるんなんら、私がなんでも聞くよ？」

私は悟られまいと、何度も否定したのだが、彼女は信じてくれない。
人の心の変化をすぐに読み取ってしまうのは、彼女の長所でもあり、短所でもあった。
結局、その押しに負けた私は、昨日のことを白状することにした。

「実はね、昨日、拓海に告白したんだ」

それを聞いた彼女の目を見開き、まるでお化けでも見たかのように驚いた顔になった。

「拓海って、二ヶ月くらい前に入院してた子？　また入院したんだ」

「うん、十日くらい前に事故でね」

「そっかー。あのときは千瀬、興味ないなんて顔してたけど、まさか好きになるとはねー。もしかして、最近笑うようになったのも、彼のおかげだったりして」

私は黙ってうなずいた。すると、彼女は今度は嬉しそうに微笑んだ。

「そりゃあ拓海くんに感謝しないとね。で、返事はどうだったの？」

私はしばらく間を置いた後、静かに口を開いた。

「だめだったよ。告白したけど、ごめん、だって」

しばらく美里は私の顔をじっと見ていたが、

「千瀬、なんでダメか理由きいたの？」

「きいてない。私じゃダメだよねって言ったら、『違う、そんなんじゃない。けど、ごめん』って……。でもね、私もういいの。美里にきいてもらえたし、もう大丈夫――」

「そんなのおかしいよ」

私の言葉を遮るように、彼女が口を開いた。その顔は明らかに不満そうだった。

「違う、けどごめんってなに？　そんなの千瀬をふる理由になってないじゃん。私が千瀬の立場だったら、全然納得できないよ」

それから彼女は急に立ち上がり、私の手を握った。

「今から行こう、そいつのところに。行って、ちゃんとした理由、聞いてこよう」

「別にいいよ、そんなの。もう終わったことだし……」

「じゃあ、私ひとりでも行ってくるよ。いいの？」

彼女が決めたことは必ずやろうとする性格なのは、私はよく知っている。こうなったら、鬼だって彼女を止めることはできないだろう。

「しょうがないなあ……」

こうして、私は半ば強引に彼の部屋に行くことになった。しかし、それでも私が彼女を強く引き止めなかったのは、彼の部屋に行く口実を、自分自身に押し付けたいだけだったのかもしれない。

エレベーターを降り、廊下を歩く。いぜんとして、彼女は私の手を強く握り、ずんずんと前を進んでいた。

気がつくともう私は美里の手によって、扉の前まで来ていた。

「ちょ、ちょっと待って――」

心の準備など与えられるはずもなく、美里は扉を勢いよく開けた。

「たのもー！」

たのもーって……道場破りじゃないんだから。

いきなりの来訪者に、拓海は面食らったようにこちらを見た。

「千瀬と……あのー、どちらさまですか？」

当然の反応だ。

「私は千瀬の友達で美里っていいます。今日は、あなたに理由をききにきたの」

「理由って？」

「千瀬をふった理由よ！　ごめんだけじゃちゃんとした理由にならないでしょ！」

彼は目線を下げ、黙り込んでしまった。悩んでいるのだろう。彼の苦悶の表情が目に浮かんだ。

「美里、もういいよ。帰ろう？」

「ダメよ。納得できるまで帰らない！」

「なあ……」

私たちのいい争いを止めたのは、以外にも、議論の中心となっている拓海自身だった。

顔を上げ、真剣なまなざしを美里に投げかける。

「美里、だったけ。ちょっと、千瀬と二人だけにしてくれないか？」

彼の提案に、私の胸が一度だけ、大きく鼓動した。

「いいわ。ちゃんと千瀬に理由を言うのよ」

そうして美里は、がんばれの合図だったのだろう、私の肩をポンと叩いて出て行った。

一人残され、立ちつくす私に、拓海は椅子を差し出した。

それに座ると、しばらく無言の時間が流れていく。

気まずい。お互いがうつむき、顔を合わさないようにしている。

いたずらに時間だけが過ぎていく。このままでは、美里がしびれを切らして部屋に戻ってきてしまう。

ふいに、私の視界の上から、一枚の写真飛び込んできた。

海をバックに、小学校低学年くらいの男の子が、男の人に肩車をしてもらい、その隣には女の人が肩を寄せて立っている写真だった。

みんなとびっきりの笑顔で、私には幸せそうな家族の写真に見えた。

「これは？」

「その肩車してもらってるのが俺」

そういえば、どことなく拓海の面影がある。特にこの笑顔なんか、今と変わらない。

「じゃあ、この二人は拓海の両親？」

「多分……な」

「たぶん？」

彼は少しためらった後、意を決したように息を吐いた。

「思い出せないんだ。自分の親の顔も名前も」

「それ、どういうこと？」

彼は目線を少し上げた。

「医者が言うには、事故の後遺症だって……。記憶がだんだん消えていくらしい……」

今にも消えてしまいそうな弱々しい声。彼の体が小刻みに震えている。

そういえば、彼が海の写真を見せてくれたとき、一枚思い出せない写真があった。あのときからそうだったのだろうか。

「拓海……」

「怖いんだ。自分の大切な人を忘れるのが……。自分が一人になっていくみたいで。だから、これ以上辛い思いするくらいなら、もう大切な人なんてつくらなけりゃいいなんて思っちゃったんだ。バカだろ、俺？」

彼は笑って言った。でもその笑顔には、悲しみと自嘲が表れていた。

彼は話を続ける。

「俺さ、日に日に千瀬の存在が、心の中で大きくなってることに気

づいたんだ。だから、この後遺症のこと昨日の夜言うつもりだった。言って、俺のこと忘れてもらって、自分の気持ちに区切りをつけようと思ってた。……けど、結局言えなくて……。そしたら千瀬、あんなこと言ってくるんだもん。俺、もうどうしたらいいかわからなくなってさ……」

私は自分の両手を強く握り締めた。彼のちょっとした変化にも気づかなかった自分が、腹立たしかったから。

「でもさ、今なら言える。もう全部話したしな」

拓海の口からつむぎだされるその先の言葉を、私は聞きたくない。それを聞いてしまえば、二度と元に戻れなくなると、直感的に思ったから。

「千瀬、俺のことはもう忘れて――」

私は衝動的に立ち上がり、彼の言葉を塞いだ。自分の唇で。それが私のファーストキスだった。

「ん……」

唇を離す。彼は混乱と恥ずかしさで言葉を失っているようだ。

「忘れられるわけないじゃない……」

「千瀬……」

「私に生きることを教えてくれて、私が生まれて初めて本気で好きになった人を、そんなに簡単に忘れられるわけないじゃない！」

それから私は、彼を抱きしめた。いつか彼がそうしてくれたように。

「私は絶対に忘れない。拓海の記憶の中から私がいなくなっても、ずっとそばにいる。どんなことがあっても、絶対に！」

そして、彼は泣いた。『ありがとう』と何度も呟きながら。

私は彼が泣き止むまで、ずっと抱きしめていた。

やがて、彼は涙交じりの声で私に問いかける。

「なあ、今さらかもしれないけど、昨日の返事、改めてしていいか？」

「うん」

彼は抱きしめている私の体を離すと、そっと唇を近づけた。私もそれに答えるように目を閉じる。

今度は少し長めのキス。二度目のキスは、涙の味がした。

「やっぱりこういうのは、男からするもんだよな……」

そして笑った。彼らしい温かい笑顔だった。

「これからよろしく！」

「こちらこそ」

私もつられて笑顔になっていた。

◆

それから部屋を出た。廊下の角を曲がると、ベンチに美里が座っていた。

「どうだった？」

「ありがと、美里」

いきなり感謝された美里は、驚いて目を丸くした。

「美里がいなかったら、私、誤解してたままだった。全部美里のおかげだよ」

「千瀬、それって……」

私の笑顔を見て、全部悟ったのだろう。美里は満面の笑みを見せると、『おめでとー！』と私を抱きしめた。

自分のことのように喜ぶ美里を見て、私は決心した。

これから彼との思い出をたくさんつくろう。彼と私自身のために、できることはなんでもしよう、と。

第9話：約束

拓海の言ったとおり、後遺症は少しずつ彼の記憶を奪っていった。人の名前や顔、道具の使い方、簡単な計算式――ほんとに少しずつだったが、それらは確実に彼の記憶の中から消えていった。
私は彼が私の病室に移ってきたことをきっかけに、彼専属の家庭教師になった。
この前は、掛け算の七の段を教えたっけ。一生懸命復唱している彼の姿を見て、思わず口元が緩んだのを覚えている。
そして夜になると、私たちは片方のベッドに座って、窓の外を眺めながら話していた。
彼の肩に自分の頭をあずけていられる瞬間が、一日のうちで一番幸せな時間だ。
この間、彼に『夜の千瀬は昼間と違って、甘えん坊だな』なんて言われたときは、顔から火が出そうなくらい恥ずかしかったけど。
こんな生活に、私は満足していたが、やはり、彼が私のことを忘れたら、という不安は影のように私についてきた。
だから、彼が朝一番で『おはよう、千瀬』と言ってくれるのが嬉しかったし、一日一日を大切に生きていこうとも思えた。

「なあ千瀬、海行かないか？」

「え？」

ある日、彼が突然こんなことを言い出した。七月の暑さも本格的になった頃だった。
そういえば、昨日海開きしたばっかりだったっけ。

「確かに行ってはみたいけど、そこまでどうやって行くのよ」

私の知っている限り、ここから一番近い海でも、車で二、三十分はかかるはずだ。

「そこらへんは、看護婦さんに頼んだから大丈夫」

「看護婦さんに頼んだ！？　ほんとに！？」

「ああ。『仕事が終わってからだったらいいわよ』って、けっこうあっさり」

看護婦さんの気のよさにも驚いたが、彼の行動力というのにも驚かされる。

私は大きなため息を吐く。

「で、いつ行くの？」

「今日だ」

彼の子供のような笑顔を見ながら、私はさっきより大きなため息を吐いた。

◆

午後六時になった。拓海の話だと、そろそろ看護婦さんが来るはずだ。

「二人とも準備できたー？」

そう言って現れた看護婦さんは、仕事終わりらしく、普段着を着ていた。いつも白衣を見慣れているせいだろうか、私は多少の違和感を覚えた。

「大丈夫です。行こうか、千瀬」

「うん」

彼が私の手を取って歩き出す。
途中で、看護婦さんが、日差しにあてられないようにと二人に帽子を渡してくれた。
病院から出るとそのまま駐車場に向かった。久々に歩く地上は、昼の熱気で少し熱を帯びていた。
やがて、白い軽自動車が見えてきた。

「じゃあ、入って」

私たちは促されるまま、後部座席に乗り込む。

「ほんとうに、大丈夫だったの？」

私は少し心配そうに、彼女の背中越しに話しかけた。拓海の急な頼みで、迷惑をかけているかもしれないと感じたからだ。

「大丈夫、気にしなくていいわよ。それにね、私もたまには仕事のこと忘れて、海を見るのもいいかなあー、なんて思ってるんだから」

そう言って、彼女は左手をひらひらさせてみせる。
普段は白衣の下に隠れている、意外な人間味に触れた気がして、私は心から『ありがとう』と言った。

エンジンがかかり、車は走り出した。
道路に出ると、いつも病室から見ていた景色にも、こうして見るといろんな顔があるのだとわかった。
近くで見ないとわからないことがたくさある。それを知ろうともしないで……いや、すべて知った気になって、諦観することしかしなかった過去の私を思い出すと、なんとも愚かだったと感じた。
車を走らせて二十分。並んでいたビルの数も少なくなり、だんだんと道が開けてくる。
やがて、フロントガラスの向こうに水平線が見えてきた。

「お、見えてきた」

彼が窓から身を乗り出す。私は横で、その美しさに目を奪われていた。
沈みかけた夕日に照らされ、オレンジ色に染まった海。波がたつたびに、水面がキラキラと輝いている。それは、どんな宝石も霞んでしまうほど美しく、雄大だった。
ため息が出るくらいきれいな海だ。こんな海、私の記憶にはなかった。
車は海岸を沿って走る。まだ砂浜にはまばらだが人がいるようだ。サーフボードを持った若者や、家族連れ、カップルが自分の時間を楽しんでいた。

「もうちょっと端のほうまでいったら、人気も少なくなると思うわよ」

私たちに気を利かせてくれたのか、看護婦さんは海岸のもう少し先まで車を走らせた。
しばらくして私たちは車を降りた。目の前に見える砂浜には、さっきのように人はいなかった。

「じゃあ、私は車の中で待ってるから。好きなだけ遊んできなさい」

「よし、行こう千瀬！」

彼は私の手を握り、足早に砂浜へ向かった。その瞳はおもちゃを目の前にした子供のように輝いている。ほんとに子供っぽいと思いながらも、その気持ちがわからなくもなかった。

看護婦さんにもらった帽子を被り、靴を脱いで砂浜の上に立つ。柔らかい砂の感触が心地よかった。

一歩ずつ、砂の感触を確かめながら、波打ち際まで歩く。そのたびに濃くなっていく潮の匂いが胸を躍らせた。

波は穏やかに、寄せては引いてを繰り返していた。その中にそっと手を入れてみる。ひんやりとした波が優しく私の手にあたる。その後、白い泡沫が、するりと手の甲へ落ち、消えてゆく。

その消え方が言葉では表せないほどはかなくて、切なかった。

「おい、千瀬」

彼の声に振り向くと、いきなり水の粒が私のほほに当たった。横では彼がしてやったりといった顔でこちらを見ていた。

私はそれに答えることなく、黙ってうつむく。

「あれ？　もしかして、怒った？」

一転して、心配そうに彼は私の顔を覗き込む。その瞬間、

「ウソ」

と言って、私は彼にも水をかけてやった。

それからしばらく、二人で海を眺めたり、おしゃべりしたりした。海に来たといっても、やっていることは何も変わらない。今、彼の隣に私が座っているのも、いつもと変わらない風景だ。けど、なんだかすべてが新鮮に感じられた。

「ねえ、なんでいきなり海に行くなんて言いだしたの？」

私が尋ねると、彼は笑って言った。

「だって、行きたいって言ってたろ、千瀬」

そうだ。あのとき約束したんだ。海に一緒に行こうって。私自身が忘れてた約束だったのに、いつ記憶が消えるともわからない彼が、ちゃんと覚えていてくれたことが、私はたまらなく嬉しかった。

「なあ、海見てるとさ、ああいうの思い出さねえ？」

「なに？」

「ほら、漫画とかだったらさ、よくカップルが波打ち際で追いかけっこするじゃん」

私は思わず吹き出してしまった。いつの時代の漫画だろうか。

「なにそれ。拓海、そんなことしたいの？」

私は笑いを抑えながら、彼に尋ねる。すると彼は目線を海にやったまま、私の右手を握った。

「そんなことしなくても、千瀬はここにいるじゃん」
そう言う彼の顔が赤かったのは、夕日のせいだったのかもしれない。
「そうだね……」
私も静かに握り返した。
「そうだ、写真撮ろうか。俺、カメラ持ってきたんだ」
彼はポケットの中からインスタントカメラを取りだした。
私たちは海をバックに、二人で並ぶ。
「ほら、もう少しよって」
「わかったわよ」
肩が触れ合う。いつも隣にいるはずなのに、なんだか変にドキドキする。
「はい、チーズ」
シャッター音が波の音に吸い込まれていった。
「じゃあ、もう一枚……あれ？」
「どうしたの？」
彼はばつが悪そうに頭をかいた。

「フィルム切れちゃった。さっきので最後だったみたいだ」

私たちは二人で叩き合って笑っていた。

このときばかりは、私の病気も、彼の後遺症も忘れることができた。

私ね、こんな時間がずっと続くと思ってた。

意味のないおしゃべりしたり、ケンカしたり、またこうして海を二人で眺めたりできるって、ずっと信じてたんだ。

――だから、だからね、私、知らなかったの。あなたが私に隠してたことの大きさも、あなたがこんなにも早く、私の前からいなくなっちゃうことも。

全部、知らなかったんだ。

この二日後の朝、彼が私に『おはよう』と言ってくれることはなかった。

第１０話：太陽のない部屋

「おはよう、拓海」

彼の笑顔が消えた日から、私はこうして彼の病室に行き、『おはよう』とあいさつするのが日課になっていた。

「今日ね、久しぶりに朝ごはん完食したんだよ。えらいでしょ」

病室の花を取り替えながら、ベッドに横にたわっている彼に尋ねる。
だが、返事は返ってこない。
代わりに、生命維持装置の無機質な音が、秒針のように正確に鳴っているだけだ。
彼はいわゆる植物状態だった。

「あとね、占いで一位だったんだ。今日は何かいいことあるかもね」

私がどれだけしゃべりかけようとも、その口は呼吸器に覆われ動かないし、私の頭をなでてくれた手も、二度と動くことはない。
そうわかっているはずなのに、私は彼に話しかけてしまうのだった。
私は彼の横にそっと座った。

「ねえ、どうしてずっと黙ってたの。私ね、この前看護婦さんから聞いたんだよ。拓海が、もしかしたらこうなるかもしれないって、最初から知ってたこと」

看護婦さんが教えてくれた。
事故によってできた障害は、記憶を奪うだけでなく、最悪の場合、突然意識を失って、植物状態になる危険性があったこと。

それを、彼は私に話さなかった。
それは、私に無駄な心配をかけさせたくないという、彼のいつもどおりの優しさだったのだろう。
でも今はその優しさが茨のように、私の胸をちくちくと痛めていた。

「拓海、ずるいよ。いつもそうやって、大切なことは言わないで、平気な顔して笑ってるんだから……。最後に迷惑するのは私なんだよ？」

こんな言葉も、彼の耳には届いていない。部屋を支配するのは、定期的な機械音だけだった。

「じゃあ、私帰るね」

そう呟いて、私は立ち上がる。
扉の手前で一度だけ振り返った。もしかしたら、彼が目を覚ますかもという、淡い期待を抱いて。
しかし、そんなことあるはずがなかった。窓から陽炎が揺らめいているのが見えるばかりだった。
自分の病室への廊下を歩きながら、私は胸を抑えた。
拓海がいなくなったあの日から、私は小さな発作を繰り返していた。
それは生きることを拒んでいるようにも思えた。
『拓海のいない世界なんて、死んだほうがましだ』という自分と『死にたいと思うのは、彼との約束を破ることになる』という自分。
その葛藤が、私を苦しめている。
その狭間で、太陽のなくなった花のように、私は日に日に弱っていくのがわかった。

「千瀬ちゃん、今日も拓海くんのところに行ってたの？」

「うん」

「そう……。大丈夫？　顔色、悪いみたいだけど……」

「平気よ。気にしないで……」

そう言う私だったが、急に動悸が激しくなり、近くの壁にもたれかかる。

足の力が抜けて、そのままひざを地面に落とした。

誰かが私の名前を叫んでいるのが聞こえる。しかし、それも視界の閉鎖と同時に遠くに感じるようになる。

そこで私の意識は途絶えた。

◆

私が目を覚ますと、視界に人影が二つ映った。

「お父さん……お母さん……」

そこにいたのは私の両親だった。いつもは仕事が忙しく、お見舞いにくることはまれだった。

「病院から、すぐにきてほしいと連絡があってね。二人で仕事を抜け出してきたんだ」

お父さんが私の手を握りながら言った。お母さんも横で心配そうに私を見つめている。

しばらくして、看護婦さんが部屋に入ってきた。

「先生がお呼びです」

二人は看護婦さんに連れられ、部屋を出て行く。
おおかた予想はつく。多分、私の残りの寿命のことだろう。
私は起き上がり、まだ少し痛む胸を抑えながら、目の前の空のベッドを見た。
あれから何度、彼の夢を見ただろう。
一緒に買い物したり、映画を見たり、勉強したり、そして、また二人で海を眺めたり――そんな妙に現実味のある夢ばかりだった。
だから、朝目覚めたとき、目の前の空のベッドを見て、私は思い出す。

――彼はもういないんだ――と

夢は文字通り夢で終わって、代わりに冷たい現実が私を突き放す。
そんな感覚を、何度も体験した。

「もう、疲れちゃった……」

禁断の言葉を口にしようとしている自分。歯止めをかけてくれるようなものを、今の私は何も持ってはいなかった。

「死にたい……」

ついに言ってしまった。彼との約束を破ってしまった。
でも、その瞬間、私の目からどっと涙があふれ出した。
わからない。なぜこんなに涙が出るのかわからない。

「ん……っぐ……っく……」

涙は拭うほど、私の目からあふれてくる。

そのまま私はうずくまって泣き続けた。
私が少し落ち着いた後、両親が病室に戻ってきた。
泣いたのだろうか。心なしか、目が赤くなっているように見えた。
「先生、何て言ってた？」
私の質問に、煮えきれらない表情で黙る両親。私は一つ息を吐いた。
「わかってるよ。残りどれくらい生きられるかってことでしょ」
お父さんは重そうに首を縦に動かした。隣のお母さんは、もう目が潤んできていた。
「どれくらいなの？」
しばらくの沈黙。私は静かに待った。
やがて、視線を落としたお父さんが、震えるような声で呟く。
「長くて、あと、二週間だそうだ……」
言い終わり、二人は涙を流し始めた。
「二週間か……思ってたより短かったな……」
「ごめんな……。できることなら、お父さんが代わってやりたいのに……。ごめんな……」
泣いている二人を見て、私は思った。
ここにも、私が死ぬのを泣いてくれる人がいたのだ。もう少し、早

く気づけばよかった、と。

その後、二人を病室から見送った後、私はなにをするでもなく、ぼーっと空を見ていた。
自分の人生の期限が宣告されたというのに、私は特別何も感じていなかった。
残り二週間何をして過ごそうとか、死ぬってどんな感覚なんだろうとか、挙句の果てには、向こうで拓海が来るのを待つのもいいかな、なんてことを考えてもいた。

『俺は笑って死にたい』

そういえば、昔彼がこんなことを言っていたのを思い出す。

「私も、最期は笑っていよう……」

そう空に向かって呟いた。

第１１話：転機

残り二週間の命。
そう告げられて三日がたったが、私は自分が死に近づいているという実感がわかなかった。
確かに胸の痛みは少しずつ増し、体調の優れない日も続いている。
それでも、私にその実感がないのは、おそらく、死が怖くないからだろう。
しかし、それは昔のように、死は人の必然なのだから、そこから逃れることはできない、なんていった諦めに似たものではない。
私は精一杯、死に抗った。だから、その結果が二週間という短い寿命でも、生きることへの喜びや、幸せを知っている私には、死ぬなんてことはちっぽけなものに感じられたのだ。
今、私にとって残念なことは、安静のために自分の病室から動くことができず、拓海のお見舞いに行けないことだけだった。

「拓海、大丈夫かな」

憎らしいほど高く昇った太陽を見ながら、私はある人を待っていた。
私の予想だと、今日くらいには来るはずだ。
そんなことを考えていると、扉のノック音がした。
そこにいたのは案の定、私が待っていた人だった。

「千瀬、お見舞いに来たよー」

「ありがと、美里」

美里は、暑さにも負けないくらい元気だった。
拓海の笑顔が、春の包むような温かさを持った笑顔なら、美里は周

囲を活気付かせるような、夏を思わせる笑顔だ。

「急に来てもらって、悪かったわね」

「いいよ。私も夏休みに入ったら、すぐに行こうと思ってたところだったし。でも昨日、千瀬のお父さんから電話で『お見舞いに行ってやってくれませんか』なんて言われたときにはびっくりしたなー。そんな電話一度もなかったからさ」

美里を呼んでほしいとお父さんに頼んだのは私だった。黙っているわけにはいかないと思ったからだ。

私のことを心から大事に思ってくれて、何度もお見舞いに来てくれた彼女に、黙って死んでしまっては、後悔してもしきれない。

それに、彼女だってそんなこと望んでいないだろうから。

「そういえば、まだ拓海くんは下の病室なの？」

「うん、まだね……」

「ふーん。で、彼とはうまくいってるの？　何か進展あった？」

「いや、ないよ。フツーだよ」

私は彼の本当のことを言わなかった。口に出せば、あのときのことが思い出されて辛かったから。

彼女は『そっかー』と口では残念そうに言っているが、ニヤニヤとした笑顔をつくっていた。

それから、しばらく二人でしゃべっていた。

テストの点が落ちた、とか、夏休みの予定がどうだ、とか、私も早く彼氏がほしいな、とか……どこにでもあるような女子高生らしい

会話だった。
美里は楽しくしゃべっているが、私はというと、いつ話を切り出そうかというタイミングを計っていた。
頭では言わなければいけないとわかっているのだが、まだどこかで、この時間をもう少し楽しんでいたいという思いが隠れていたのだろう。
私はなかなか、話すきっかけをつかむことができないでいた。

「ちょっと私、トイレ行ってくるね」

美里がそう言って部屋を出て行く。
彼女が戻ってきたら、今度こそちゃんと話そう。
私はそう決心して、ベッドの上で慎重に言葉を選んでいた。

「お待たせ」

数分後、美里が部屋に戻ってくる。この機会を逃せば、私は二度と彼女に真実を伝えることができない気がした。

「あのね、美里。ちょっと聞いてほしいことがあるの」

「なに？」

彼女はとぼけた表情で首をかしげた。私は深呼吸して、ゆっくり言葉を吐き出す。

「驚かないで聞いて。私ね、三日前、残り二週間しか生きられないって言われたの……」

彼女は少し表情をこわばらせていたが、視線を下に落とし、私の両

手を包むように握った。

「……知ってたよ」

「……え？」

彼女の意外な言葉に、驚いたのは私のほうだった。

「電話もらったときね、千瀬のお父さんの声、なんだか震えてたからさ、ちょっとしつこく聞いちゃったの……。そしたら、ね……」

ついさっきまでとは対照的な、弱々しい声。時々、そこに嗚咽も混じっていた。

「だから……だから明るく振舞おうと思ってた。そうすれば、千瀬の寿命のことは忘れていれたし、いつもどおりにすれば、また千瀬の笑顔が見られるって思ってたから……」

「美里……」

「でも……無理だよ、いつもどおりなんて。できっこないよ、千瀬が死んじゃうかもしれないのに……」

それから、彼女は堰を切ったように泣き始めた。

私を抱きしめて、子供のように泣きじゃくった。

私はそんな彼女の背中を見ながら、あぁ、ここにもいたんだ。私のために泣いてくれる人が、と感じて、そっと『ありがとう』と呟いた。

それから私たちは、面会時間ギリギリまで他愛もない会話を続けた。

まるで高校生活の遅れたぶんを取り戻すかのように、ずっとしゃべっていた。
そして、名残惜しい気持ちになりながらも、美里は私に別れを告げ、病室をあとにする。
私は、一人でいるには中途半端に広い病室を見回しながら、今日の美里との思い出を反芻するのだった。

◆

私の残りの命も、半分を切ったころだ。
私は、ベッドの上から外の景色を眺めていた。朝から降り続いていた雨がついさっき止み、オレンジ色の夕焼けが、雲の隙間から顔を出している。
今日を過ぎれば残り六日。いや、あくまで長くて六日なのだから、明日突然死んでしまうなんてこともありえる。
でも、もう未練はない。私は精一杯やった。だから、今の私には、どんな結果でも受け止められる覚悟がある。

「少し寝ようかな」

夕飯までの少しの時間、私は横になることにした。
そのとき、部屋の扉が急に開けられ、横になろうとした私の体は、ベッドにつく前に元に戻った。
現れたのは、私の主治医の先生と、知らない男の人だった。

「どうしたんですか？」

「千瀬ちゃん、嬉しいニュースだ。君のドナーが現れた」

その言葉を理解するまで数秒を要した。

私にドナーが？　ということは、私は助かるかもしれないのか？
そんなことを考えているうちに、先生が隣の男の人に手をやって、話を続ける。

「こちらは君の手術をしてもらう、心臓外科の内村先生」

「執刀医の内村です。急なことで申し訳ありませんが、心臓の負担のことも考えて、手術は明日の昼ごろに行いたいと思っています。もちろん、手術スタッフ一同、綿密な会議をして、万全の状態で手術を行います。どうですか？」

私はゆっくりうなずく。急なことだったので、頭が体についていっていない。

「じゃあ、ご両親にはこちらから連絡をいれておくから。また詳しい話はそのときにね」

「大丈夫、全部私たちに任せておいてください。必ず成功させます」

二人は私に礼をすると、部屋から出て行く。
夕立のように一瞬のうちに起こった出来事に、私はしばらく放心状態だった。
数分して、その放心状態から開放された後も、私の心に何か引っかかるものがあった。
もちろん、生きる可能性が残されたことが嬉しくないはずがない。
だけど、私はそのことをなぜか手放しで喜べないでいた。そして、直後に脳裏に浮かんだのは、拓海の顔だった。
その感情が何なのかはわからないが、拓海の所に行けば、それがわかる気がして、私の足は自然と拓海の病室へと向かっていた。

一週間ぶりに訪れた拓海の部屋は、何一つ変わっていなかった。花瓶の水も、看護婦さんが変えてくれたのだろうか、花はみずみずしさを保ったままだった。

「拓海、久しぶり」

私は彼の横に座った。

「あのね、ドナーが見つかったんだ。明日、手術だって。私、まだ生きられるかもしれないんだって……」

目を閉じたままの彼にそう語りかける。返事はもちろん帰ってこない。

そのとき、私がさっきまで引っかかっていた感情がほのめいた。拓海の顔を見れば見るほど、それははっきりと輪郭を帯びていく。一言で表すとすれば、『罪悪感』に近いものだと、気がついた。

「ねえ拓海、いいのかな、生きても……。あなたがこんなに苦しんでるのに、私だけ生きても……」

もし神様がいるとしたら、なんて気まぐれで残酷なのだろう。死を覚悟を持って受け止めようとした私に、今度は生きろと言うのだ。どこまで私を困らせれば気が済むのだろうか。

気がつくと、彼の手を握っていた私の耳に、懐かしい声が届く。とても温かい響きだった。

『千瀬』

「拓海……」

声の主は拓海だった。いつの間にか真っ白な世界に、彼と私は向かい合っていた。

『せっかく生きられるかもしれないんだ。手術、絶対受けろよ』

「でも、拓海が……」

『俺のことは気にするな。俺は、千瀬に生きててもらいたいんだ』

そう言って、私の頭を優しくなでる。久しぶりに触れる、彼のぬくもりに、私は目を細めた。

『じゃあ、明日の手術、がんばれよ！』

彼が目の前から姿を消す。私は慌てて彼の腕をつかもうとした。

「待って！」

叫んだ瞬間、私の見ていた景色は、元の拓海の病室へと戻っていた。

「夢か……」

どうやら知らないうちに眠っていたらしい。私は寝てもなお、握っていた彼の手を見つめながら思った。

さっきの夢は、きっと拓海が見せてくれたんだ。この手を伝って、彼が私を勇気付けてくれたんだ、と。

「私、もう迷わないよ。がんばるからね、拓海」

私は彼にお礼を言って、彼のぬくもりをその手に宿したまま、部屋を出て行った。

◆

翌朝、両親とともに手術の説明を受けた私は、自分の病室でそのときが来るのを待っていた。
先生は難しい手術になると言っていた。仮に成功しても、心臓が拒否反応を起こす場合もあるらしい。
それでも、私に怖いものはなかった。生きたいという強い意志を、私はたくさんの人にもらったから。

「千瀬ちゃん、行きましょうか」

看護婦さんが私を迎えに来た。
私は手術台に移り、両親の顔を見た。二人とも『大丈夫』とでも言うように、力強くうなずく。私もそれに答えるようにうなずいた。
手術室へ向かうベッドの車輪の音は、私に拓海との思い出を、走馬灯のように回顧させていた（手術直前に走馬灯みたいにとは少し縁起が悪いが）。
生きることを諦めていたころのこと。そんな私に、生きる喜びを与えてくれた拓海に、いつの間にか惹かれていったこと。
彼と屋上で星を見て、告白して、ふられたこと。その後、美里と彼の部屋に乗り込んで、彼の泣き顔を見たこと。
そして、約束の海に一緒に行ったこと――。
たくさんの思い出を、私はココでつくった。思えば、私の中心にはいつも彼がいた。
もう今は、彼の笑顔を見ることができないけど、手術が成功したら、真っ先に彼の部屋に行って言うんだ。

『ありがとう』

って。

手術室の手前まで来た。

「がんばるんだぞ」

「応援してるからね」

「うん。ありがとう。お父さん、お母さん」

最後に別れのあいさつをすると、私の体は扉の向こうへ吸い込まれる。

テレビで見るような手術室へ入ると、大きなライトが上空へ現れた。

「じゃあ、麻酔かけますね」

右腕にチクリとした痛みが起きた後、だんだんと目の前のライトの輪郭がぼやけ始める。

間もなく、私の意識は白い光に飲み込まれていった。

最終話・前：あなたがいた

気がつくと、目の前にあったライトは姿を消し、代わりに真っ白な天井が視界に映っていた。窓から見える景色は、すでに深い闇が落ちていた。

「千瀬、気がついたか？」

「お父さん……お母さん……」

私の顔を見るなり、二人ともボロボロと泣き出した。

目覚めきっていない頭で、おぼろげな記憶の糸をたどってみる。

そうだ、私は手術を受けていたんだ。麻酔で眠ったと思ったら、いつの間にか違う病室のベッドの上。

時間の切れ端がくっついたような不思議な感覚だった。

「お父さん……手術、は……？」

「成功したよ……よくがんばったな……ほんとに、よくがんばったな……」

私の手を、お父さんが震えながら握っている。その横で、お母さんは何も言わずにただ泣くばかりだ。

そんな二人を見ながら、私は生きている喜びを実感していた。

心臓の鼓動音や、呼吸、そして、流れる涙の一粒でさえ愛おしい。

生きているという幸せが、私の流れる血とともに、全身を駆け巡っていくのがわかった。

「さあ、今日はゆっくり寝てなさい」

「うん……」

もう一度目をつむる。温かい幸福に包まれながら、私は再び眠りについた。

◆

翌日のお昼、私は真夏の日差しに起こされた。部屋には看護婦さんが一人いた。

「手術成功してよかったね、千瀬ちゃん」

彼女が嬉しそうに言った。私は微笑みながらうなずいた。

鉛のように重たい体を起こす。胸の辺りに、昨日は感じなかった手術跡の痛みを感じる。

でも、その痛みさえ私が生きている証なんだと思えた。

ふいに、私は拓海に会いたくなった。夢の中で、彼の顔が何度もちらついていたせいかもしれない。

私はダメもとで彼女に聞いてみる。

「看護婦さん、今から彼の部屋に行ったらダメかな？」

彼女は少し考えた後、

「いいわよ。行きましょうか」

と、意外にも快諾してくれた。

私は驚いた。てっきり、『安静にしてなくちゃいけないからダメよ』と言われると思っていたから。

私は車椅子に乗り、後ろを看護婦さんに押してもらいながら、彼のところへ向かった。
彼に会ったらまず『ありがとう』って言おう。
そして、退院しても、彼のところへお見舞いに行くんだ。私が生きている間は、何度でも。
彼の病室の扉を開ける。つい二日前来たはずなのに、なぜか久々に感じた。
部屋ではカーテンが閉められ、私とベッドを隔てていた。
窓から入ってきた風が、カーテンを膨らませる。
その一瞬、私の視界に飛び込んだのは、誰もいない、空のベッドだった。
見間違いかなと思い、カーテンを引いてみる。しかしそこにはやはり拓海はおらず、整頓された、しわ一つないベッドがあるだけだった。

「看護婦さん、拓海はどこ行ったの？」

私の問いに、彼女は何かをためらうように黙っていた。
やがて、服のポケットに手を入れると、そこから一枚の白い封筒を取り出した。

「これ、海に行った次の日ね、拓海くんが、千瀬ちゃんの手術が成功したら、渡してくれって……」

私は彼女の言葉に少し違和感を覚えた。
だって、拓海は手術のことを知らないはずなのだから。それとも、私がもし手術を受けることがあったら、という前提なのだろうか。
私は彼女から封筒を受け取ると、中身を取り出した。
便箋が二枚入っている。彼の筆跡。決してきれいな字とは言えないけど、彼らしい温もりを感じる。

『千瀬へ
この手紙を読んでるってことは、手術が成功したみたいだな。おめでとう。
俺、千瀬に一つだけ謝らなくちゃいけないことがあるんだ。もう知ってると思うけど、もしかしたら植物状態になるかもしれないってこと、千瀬にちゃんと言えなかった。
急に千瀬を一人にして、寂しい思いもさせたかもしれない。ほんとに、ごめん。
だからさ、そのお詫び……ってわけじゃないけど、俺の心臓、千瀬にあげることにした。
後遺症がわかった日にさ、ドナーカード持って先生のところ行って検査しもらったんだ。そしたらさ、俺の心臓、千瀬の心臓とぴったりだって。驚いたよ。
こんなことしても、結局俺は千瀬の前からいなくなるんだから、もしかしたら千瀬は喜ばないかもしれない。でも、俺バカだから、こんなことしか思いつかなかったんだ。ごめんな。
千瀬はあの世に嫌われてる男の心臓をもらったんだ、とうぶんの間は死なないよ。まぁ、今の俺が言っても説得力ないか。
最後に、俺のわがまま、二つだけきいてくれ。
一つは、封筒の中に写真が一枚入ってる。二人で海に行ったときの写真だ。
写真の現像は、看護婦さんに頼んだから、俺の代わりにお礼、言っといてくれ。
二つ目は、一生懸命生きてくれ。俺のぶんまで、楽しい思い出たくさんつくって、たくさん笑ってくれ。
俺は向こうで、千瀬の笑顔見てるからな。
じゃあ、ほんとにこれでお別れだ。こんな俺のこと好きになってくれて、ありがとう。
大好きだよ、千瀬』

最後の一文は、少し控えめに書かれていた。
私は封筒の中から一枚の写真を取り出す。
あの日、彼と海で撮った写真。夕焼けに染まった海の前で、二人が肩を寄せ合って笑っていた。本当に幸せそうな笑顔だった。
私の内側から熱いものがこみ上げてくる。もう痛みを感じる余裕もなく、ただ涙が写真を濡らしていくだけだった。

「千瀬ちゃん……」

看護婦さんが車椅子の後ろから、私を静かに抱きしめる。
私は声をあげて泣いた。

それからしばらくして、私たちは部屋を出た。
私はまだ気持ちをおさめることができず、肩を振るわせながら泣いていた。
エレベーターに乗り込むと、看護婦さんがなぜか下へ行くボタンを押した。私は嗚咽でその理由を聞くことができなかった。
エレベーターを降りると、肌寒さを感じる廊下を渡り、一つの部屋の前で車椅子は止まった。

「ほんとは、いけないんだけどね……」

そう言って、彼女は部屋の扉を開ける。
湿っぽいような、かび臭いようなにおいの後、私の目の前に、白いシーツを被ったものが現れた。
それにゆっくりと近づく。もうこのとき、私はそれがなんのかわかっていたのだろう。
白い小さい布を外す。その下から現れたのは、私が一番会いたかった人の顔だった。

「拓海……」

私の呟きが、暗い部屋の中で木霊した。

「なんで……なんで、笑ってるのよ……」

彼は笑っていた。いや、笑っていると私が思いたかっただけなのかもしれない。でも、私には拓海が確かに笑っているように見えた。

「私、一生懸命生きるからね……。だから、ずっと見守ってて……」

私は彼にキスをした。涙が一つ、彼の冷たい唇にこぼれ落ちた。

「ありがとう、拓海」

そうして、私たちは部屋を出て行った。

その間、私は一度も振り返らなかった。振り返ってしまえば、二度とこの部屋から出られなくなる気がしたから。

「看護婦さん……」

自分の病室の手前で、私は彼女に尋ねた。

「なに？　千瀬ちゃん」

「ありがとう……」

彼との約束のお礼、それから、いけないとわかっていながら、私を彼と会わせてくれたお礼を、彼女にした。

「どういたしまして」

そう言う彼女の目は、少し潤んでいた。

◆

あれから一ヶ月弱。私はとうとう、退院の日を迎えた。
心配された拒絶反応もなく、術後の経過も順調だ。

「千瀬、行くよー！」

扉の向こうから、美里の呼ぶ声が聞こえてくる。今日のために、学校を休んできてくれたらしい。

「今行くよー」

看護婦さんにもらった花束を抱えながら、私は病室を見回した。
ほとんどのものが片付けられ、部屋はなんとも殺風景だった。
この部屋で、私はいろんな経験をした。
泣いたり、笑ったり、怒ったり、恋をしたり――ほんとにたくさんの思い出をつくった。
彼がいたベッドに目をやる。今でもそこに、とびっきりの笑顔の彼が、あぐらをかいて座っている残像が甦った。
私はポケットの中から、彼の手紙を取り出す。突然窓から入ってきた風が、それを宙に舞わせる。
床に落ちた手紙を拾い上げようとした私は、思わず目を留めた。
手紙の裏に、一文だけ書かれていた。

『俺、笑って死ねたかな？』

うん、笑ってたよ。ほんとに幸せそうで、温かい、私の大好きな拓海らしい笑顔だった。

手紙を収めた私は、窓の外を見上げた。
夏の終わりを告げる空は、気持ちいいほどの晴天だ。
その空のキャンバスを横断するように、飛行機雲が二つ、互いに寄り添うように白く伸びていた――。

最終話・後：～Ａｆｔｅｒ　ｓｔｏｒｙ～天国の海で

あれから三十年余りが経った。
彼からもらったこの心臓をとうとう止めないといけない日がきたようだ。
私は高校を卒業し、大学を出て、就職し、結婚して、普通の幸せな家庭を築いていた。
それでも、今の旦那には悪いが、彼のことは一時も忘れたことはない。だって、彼はいつも私のそばにいてくれたのだから。
私が過ごした四八年という人生は、他人から見れば、まだ短いほうなのかもしれない。
しかし、心臓移植をして二五年以上も生きた例は今までなかったのだそうだ。そう思えば、私の三十年という期間は、実に奇跡とも呼べた。
でも、私はそれを別に奇跡だとは思わない。だって、この心臓は拓海がくれたものなんだから。
私の眠っているベッドの周りでは、たくさんの人のすすり泣く声が聞こえる。こんなに大勢の人たちが、私の最期を看取ってくれるのだ。私はなんて幸せ者なんだろう。

「おばちゃん」

耳元で、誰かが私を呼ぶのが聞こえた。そこにいたのは、親戚の子だろうか。五歳くらいの男の子だった。

「しぬってなに？」

その子の顔は、ただ知りたいことを尋ねている純粋なものだった。

「死ぬっていうのはね、誰の心の中からもいなくなるってことなのよ……」

「ふーん。しぬって、こわいの？」

「怖くなんてないわよ。だって、おばちゃんには、こんなにたくさん私のことを思ってくれる人がいるもの。それにね――」

「それに？」

「私には、向こうで待ってくれてる人がいるの。だから、怖くなんかないの」

「そのひとだれなの？　ぼくのしってるひと？」

「ふふ。秘密」

そう言うと、その子はほほを膨らませた。

向こうに行ったら、彼に何て言おう。何をしよう。まあ、時間はたっぷりあるんだ。ゆっくり考えよう。

だんだん、視界がぼやけていく。今度こそ、お迎えがきたようだ。

力が抜けていくのを感じながら、私のまぶたは閉じていった。

◆

ここはどこだろう。私は死んだのだから、あの世には違いない。でも、三途の川もなければ、死装束を着た人間もいない。代わりにあるのは、白くて広い道がどこまでも続いているだけだった。

「予想してたところとだいぶ違うわね」

私は足元に広がる白い道を歩き出す。
まず彼を見つけようと思った。いくら時間がかかってもいいから、必ず見つけようと思った。
広い道は途切れることなく、ずっと私の前に続いている。その先に何があるのかは、まだわからない。

「どこにいるのかな、拓海」

歩きつかれた私は、その場に座り込んだ。死んでも疲れるんだと思った。

「とうとう来ちゃったか」

背後でそんな声が聞こえた。
懐かしい声。温かくて、優しい響きだ。
後ろを振り返ると、やはりそこには、あの日と変わらない、拓海の姿があった。

「よ、千瀬。三十年ぶり、だっけ」

「拓海……」

彼は私の前まで歩み寄ると、私の手をとった。その手から、彼の温もりが感じられた。

「行こう。千瀬に見せたいものがあるんだ」

「でも、私もうこんなに歳とっちゃって……」

私が少しためらうと、彼は首をかしげた。

「何言ってんだ。自分の姿、よく見てみろ」

そう言われて私は驚いた。手のしわも、顔のしわもなくなり、私の自慢だった黒い髪も、昔の若さを取り戻している。

そこにいたのは、拓海と出会った頃の私だったのだ。

「さ、行こう」

私は彼に引っ張られるように走り出す。子供のような彼の背中を見ながら、私は目を細めた。

「ほら、ここだよ」

拓海が連れてきたのは海だった。

白い砂浜に、コバルトブルーの海が広がっている。潮風が、優しく私をなでた。

「こっちにも、海があるんだ」

「すごいだろ。俺と千瀬のプライベートビーチだな」

そして、二人でその場に腰を降ろす。波が穏やかに、砂浜を濡らしていた。

「楽しかったか？　向こうでの生活は」

「うん。とっても楽しかった」

「そっか。じゃあ、今度はこっちで、第二の人生だな」

「そうだね」

私たちは手をつなぎ、ずっと海を眺めていた。波と風の音を聞きながら、ずっと。

「ねえ、拓海」

「ん？」

「大好きだよ」

私の言葉がよほど恥ずかしかったのか、彼は急に顔を赤らめた。

「めんと向かってそう言われると、何か恥ずかしいな」

そして彼は咳払いを一つして、

「俺も大好きだよ。千瀬」

それ以上の言葉は、もうなにもいらない。二人でこうしているだけで、幸せを感じることができるのだから。

彼に話したいことがたくさんある。大丈夫、私たちには、時間という制約はないんだ。三十年の空白を埋めるのには充分だ。

それから二人で、笑い合った。握った手を離すことなく、ずっとずっと、笑っていた――。

最終話・後：～Ａｆｔｅｒ　ｓｔｏｒｙ～天国の海で（後書き）

今までこの作品を見てくださった読者のみなさま、ありがとうございました。おかげで、こうして作品の完結までたどりつくことができました。まだまだ作者として未熟な部分もありますが、この作品を読んで、なにか少しでも感じるものを持っていただけたら、作者としてこれほど嬉しいことはありません。これからも、精進していきますので、よろしくお願いします。また、感想・評価・アドバイスなどありましたら遠慮なく書き込んでいただいてけっこうです。今は、時間と要望があれば、拓海側からの視点で話をかこうかな、なんて思っていまして……あくまで予定ですが（笑）最期まで長文・駄文ですいません。それでは、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7650f/

死にたがりの彼女と、あの世に嫌われた彼

2010年11月16日09時06分発行